

うつ病に処方される「抗うつ薬」は、実態のない「心」にではなく、脳内の神経伝達系に作用し、脳内の神経生理学的な環境を整える働きがあります。

■抗うつ薬…うつ病からの回復に必要な治療薬
病院でうつ病と診断されると「抗うつ薬」が処方されますが、人によっては精神的な症状の治療のための薬をのむことに少し抵抗を覚えることもあるかもしれません。場合によっては「薬をのめば自分の弱さを認めてしまう」といった誤解も関与している可能性もありますが、うつ病から回復するために抗うつ薬は大変重要な治療薬です。

■抗うつ薬の目的・効果…脳内の神経伝達系などに作用

抗うつ薬は神経生理学的に病的になった脳内の機能を調整します。うつ病は、親しい人との死別など、辛く悲しい出来事をきっかけに発症することもあります。ですが、それは主観的な心の強さ・弱さを反映したものではありません。病的な気持ちの落ち込みが起こる直接的な原因は神経生理学的にバランスを崩した脳内にあります。これを元の状態に戻していくために使われるのが、抗うつ薬なのです。もし抗うつ薬に対して一種の抵抗感がある場合、正しい知識を持つことでそれをなくしていきましょう。抗うつ薬は「心」という、いわば実態のないものに働く不思議な薬ではなく「脳内の神経伝達系」などに作用する治療薬だということを是非知っておいて下さい。



■抗うつ薬の服用期間・再発予防のための服用

抗うつ薬は、落ち込んだ気持ちを高めるカンフル剤的なものではありません。抗うつ薬の種類や個人個人の健康状態などから、効果発現まで1～2週間かかる場合もあれば、数週間かかる場合もあり、すぐに効果が出るものではありません。又、症状が無くなったあとも、ある程度の期間は服用を続ける必要があります。うつ病の自覚症状がなくなった直後は、脳内はまだ完全に正常化していないために、服用をやめると再発しやすくなるからです。再発の確率は過去の再発数が多ければ、応じて高くなります。

■抗うつ薬の副作用…依存性のリスクは心配ない！？抗うつ薬には、よく誤解されてい



るような依存性はまずありません。副作用は、抗うつ薬が脳内のターゲットとする神経伝達系だけでなく、他の神経系にも作用があることが大きな要因です。

一般的な副作用：口渇、便秘・排尿障害、眠気、頭痛、胃腸障害、性機能障害

その他、抗うつ薬の投与早期や増量時には不安・焦燥や衝動性の高まりが見られることもあります。

■うつ病が完全に治らない原因の一つに「薬をのむ必要がない」という、自己判断による服用中止があります。自分で治ったと思った時点では、脳内の神経伝達系の機能はまだまだ不安定で、自己判断による服用中止はうつ病を再発しやすくします。抗うつ薬をのむのをやめたくになったら、必ず医師に相談してからにしてください。

明治薬局